理論に基づく検討　中村雅彦・斎藤和志と共著，心理学研究，1990年，61，15-22.

Ⅵ　英文論文として，以下のものが執筆された。

① Managerial Career Progress in a Japanese Organization : A 13-year Longitudinal Investigation, *Applied Psychology : An International Review*, 1989, 34, 337-352.（with Minami, T.）

*② International Generalizability of American Hypotheses about Japanese Management Process : A Strong Inference Investigation. *The Leadership Quarterly*, 1990, 1, 1-24,（with Graen, G.）

*③ Union Participation in Japan : Do Western Theories Apply? *Industrial and Labor Relations Review*, 1990. 43, 374-389,（with Kuruvilla, S., Gallagher, D., and Fiorito, J.）

*④ Identifying Greative Problem Solving Style. *Jounal of Greative Behavior*, 1990, 24, 111-131.（with Basadur, M., and Graen, G.）

⑤ Cross-cultural Human Resource Development for Transfers of Production and Management Practices : Focusing on Japanese Manufacturing Firms in the Central States of America. Paper Presented at the 22nd International Congress of Appiied Psychology, Kyoto, 1990.

Ⅶ　評論として，次の3点が刊行された。

① リーダーシップ研究の課題，さいころじすと，1990年，№23，5.

② ケース海外出張，LDノート，1990年，6月号（№598），6-7.

③ 出世競争モデルからキャリア・デザインへ，DIAMOND ハーバード・ビジネス，1990年，11月号，1.

Ⅷ　調査報告書として，以下の5点を執筆した。

① 看護職キャリア発達研究（2）―2年次における看護学生の意識と行動の変化―，水野智・佐野幸子と共同執筆，看護行動研究会刊，1990年.

② 在職中の生活と退職後の生きがい―退職者の生活意識調査から，松浦いね・三浦三郎・佐藤清三と共同執筆，たばこ総合研究センター刊，1990年.

③ 女子労働者就業環境調査，宗方比佐子・佐野幸子と共同執筆，愛知県労働部刊，1990年.

④ 先端技術に対する態度の変容（3），中村雅彦・斎藤和志と共同執筆，経営行動科学研究会刊，1990年.

⑤ 企業・技術イメージの変容に関する調査研究報告書，中村雅彦・斎藤和志と共同執筆，経営行動科学研究会刊，1990年.

研究経過報告（平成2年4月～11月）

平　石　賢　二

4月に助手として着任してから，早くも半年が過ぎてしまっている。物理的な環境の変化も大きいがそれ以上に心理・社会的な環境の変化，社会的役割の変化は著しく，適応するためにかなりの時間と労力を要している。しかし，この環境の変化とそれに対する適応の問題は，私自身の研究テーマである青年期における発達課題，すなわち青年期後期から成人期前期において経験される様々な心理的課題を含んでいるため，自分自身の意識の流れを第三者的，観察自我的に眺めては楽しんでいる部分もある。特に，自己概念の変化はめまぐるしく，これは是非研究に役立てねばならないと考えている。

以下に，この半年間の研究成果と研究経過について述べていくことにする。

Ⅰ　個人研究―青年期における自己意識に関する研究―

個人研究としては，修士研究以来，青年の自己意識の問題に取り組んでいる。論文としては，後期課程に投稿した次の論文がようやく教育心理学研究に掲載された。

「平石賢二　1990　青年期における自己意識の構造―自己確立感と自己拡散感からみた心理学的健康―　教

育心理学研究，38，320-329.

また，これに続く研究として本年度の教育学部紀要に，「平石賢二　青年期における自己意識の発達に関する研究（Ⅰ）―自己肯定性次元と自己安定性次元の検討―名古屋大学教育学部紀要―教育心理学科―，第37巻（印刷中）」

を執筆した。この論文は，青年の自己発達を肯定性と安定性の2つの次元からとらえ，中学生，高校生，大学生の間で発達的にはどのような変化を示しているかについて検討している。現在は，この研究の一環として同時に実施された文章完成法形式の質問文によって測定される「重要な他者からの評価に対する意識」に関する分析を行なっている。この分析結果と自己意識の発達差との関連については，改めて教育心理学研究に投稿する予定である。

Ⅱ　共同研究

共同研究については主に以下の2つのテーマに関して研究を行なっている。

1．青年心理研究における現状と課題

これは，久世先生と大学院の辻井正次氏と共に行なっている研究であり，主として青年心理研究における構成概念の整理を目標に置いている。本年度の教育学部紀要には，

「久世敏雄・平石賢二・辻井正次　青年心理研究における現状と課題（Ⅰ）名古屋大学教育学部紀要―教育心理学科―，第37巻（印刷中）」

として執筆した。私は，「青年心理研究における現状」の部分を担当しており，心理学研究，教育心理学研究に掲載された，青年を対象としている論文418本について，研究領域，研究方法，研究対象，そして研究された構成概念の観点から整理し，現状について考察した。しかし，本研究は第Ⅱ報において完結する予定である。

2．登校拒否に関する研究

登校拒否の問題は，私の臨床領域での個人研究のテーマであると共に，共同研究のテーマともなっている。これに関しては，次の2つのグループで研究を行なっている。1つめは，池田先生ほか数名から構成されている登校拒否研究会での研究である。これは，大学院時代から教育学部紀要などに連続して論文を発表しているグループである。現在は，登校拒否の事例集を一冊の本にまとめ出版する計画を立てている。

2つめは，私と大学院の加藤礼子氏との2人で行なっている研究である。ここでは，我国における登校拒否に関する研究をレビューし，混乱している傾向のある今日の登校拒否の概念を整理し，新たな視点で登校拒否の問題を再検討することを目標としている。特に従来の研究においては抜け落ちていたと思われる発達的視点から登校拒否の様々な臨床像を再整理していくことができると考えている。この研究は，今年度中に論文としてまとめ，投稿する予定である。

以上に述べてきた共同研究は，「共同」とは言ってもすべて私自身の「個人」研究のテーマと密接に結びついており，自身の中で1つに統合されるように努力している部分である。その意味で，すべての研究は個人研究であるとも言える状態にある。

Ⅲ　その他

個人研究，共同研究以外の仕事としては，本の執筆を行なった。まず，久世先生の還暦記念として「変貌する社会と青年　福村出版」が出版された。私は，青年期における不適応現象について城野靖恵氏と分担執筆を行なった。（6章1節－2，2節）

また，現在，愛知教育大学の西頭三雄児先生，久世妙子先生らが中心となって企画している保育関係の教科書（福村出版）の一部を執筆している。ここでは，「子どもの全体的，全面的発達」に関する部分を担当することになっている。